慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	宮沢賢治と国柱会における「教育」：国柱会機関紙『天業民報』『大日本』を資料として
Sub Title	Comparison of educational thoughts between Kokuchukai and Kenji Miyazawa : by analyzing "Tengyouminpou" and "Dainippon"
Author	深田, 愛乃(Fukada, Aino)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2023
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.150 (2023. 3) ,p.85- 114
JaLC DOI	
Abstract	The purpose of this paper is to examine differences and similarities in educational thoughts between Kenji Miyazawa (1896–1933) and Kokuchukai by comparing their views of education as a part of efforts to clarify what Kenji Miyazawa tried to achieve through education. Kenji Miyazawa is generally known as a man of letters and worked as a teacher of an agricultural school, and found "Rasuchijinkyoukai," a private school for peasants. He also became a member of Kokuchukai, a lay-oriented Nichiren Buddhist group. The founder of this group was Chigaku Tanaka (1861–1939), who advocated Nichiren-ism which aimed to unify Japan and the rest of the world by the unity of religion and politics. Because it is difficult to find a relationship between Kenji Miyazawa's educational thoughts and those of Kokuchukai, this study made a comparison by looking into their educational views shown in Kokuchukai Journal, "Tengyouminpou" and "Dainippon," and works and practices by Kenji Miyazawa. Although there were multiple development possibilities in Nichiren-ism, it was found that Kokuchukai encouraged human development as a nationalist, while Kenji Miyazawa focused on way of living as "Chijin," existences who live in harmony with nature.
Notes	特集：教育学特集号 寄稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000150-0085

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

宮沢賢治と国柱会における「教育」

――国柱会機関紙『天業民報』『大日本』を資料として――

深　田　愛　乃*

Comparison of Educational Thoughts between *Kokuchukai* and Kenji Miyazawa: By Analyzing "*Tengyouminpou*" and "*Dainippon*"

Aino Fukada

The purpose of this paper is to examine differences and similarities in educational thoughts between Kenji Miyazawa (1896–1933) and *Kokuchukai* by comparing their views of education as a part of efforts to clarify what Kenji Miyazawa tried to achieve through education. Kenji Miyazawa is generally known as a man of letters and worked as a teacher of an agricultural school, and found "*Rasuchijinkyoukai*," a private school for peasants. He also became a member of *Kokuchukai*, a lay-oriented Nichiren Buddhist group. The founder of this group was Chigaku Tanaka (1861–1939), who advocated *Nichiren-ism* which aimed to unify Japan and the rest of the world by the unity of religion and politics.

Because it is difficult to find a relationship between Kenji Miyazawa's educational thoughts and those of *Kokuchukai*, this study made a comparison by looking into their educational views shown in *Kokuchukai* Journal, "*Tengyouminpou*" and "*Dainippon*," and works and practices by Kenji Miyazawa.

Although there were multiple development possibilities in *Nichiren-ism*, it was found that *Kokuchukai* encouraged human development as a nationalist, while Kenji Miyazawa focused on way of living as "*Chijin*," existences who live in harmony with nature.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程／日本学術振興会特別研究員 DC2

はじめに

本稿の目的は，宮沢賢治（1896～1933）の教育思想を明らかにするための一端として，賢治と国柱会（こくちゅうかい）によるそれぞれの教育の捉え方を比較し，両者の重なりや相違を描き出すことである．主な資料としては，賢治が国柱会に入会した 1920 年（大正 9）から賢治晩年の 1933 年（昭和 8）に及ぶ国柱会機関紙『天業民報』『大日本』上の記事を用いる．

宮沢賢治は，岩手県に生まれた童話作家・詩人として知られる一方で，法華系の在家仏教教団・国柱会に所属したことでも着目されてきた．国柱会の創始者である田中智学（ちがく）（1861～1939）は，独自に創唱した「日本国体学」（日蓮主義的国体論）に基づき，宗教にとどまらず社会や政治，芸術に及ぶ日蓮主義運動を展開した[1]．

近年，日蓮主義や智学の思想に対しては，国粋主義に迎合したという点を強調する従来の否定的理解の再考を促す，西山茂や大谷栄一などによる実証的な研究が蓄積され[2]，智学の日蓮主義的国体論はあくまでも「法主国従」説に基づくとする見解が示されてきた．さらに大谷栄一『日蓮主義とはなんだったのか―近代日本の思想水脈』（講談社，2019 年）は，日蓮主義者を三世代に区分して思想や活動を分析し，日蓮主義の国家主義的性格が重層的なものであったことを指摘した．大谷は，日蓮主義の重要な特徴として，現実の国家を超越した価値を提供する普遍主義的な側面と，現実の国家を正当化する特殊主義的な側面があり，このいずれの側面が発芽するのかは，後続世代のそれぞれの解釈に依拠することを示した．

このような研究動向の中で，賢治と国柱会の関係をめぐっても思想史的文脈に即した実証的な解明が志向されつつある[3]．その一つの試みとして，賢治が国柱会入会前後に作成した，智学の著書や日蓮遺文からまとめた抜き書き『摂折御文（しょうしゃくごもん）／僧俗御判（そうぞくごはん）』の分析が進められた[4]．この分析を通して，賢治の日蓮主義研究の過程は，智学の導きに真摯に従うものであったが，しかしそれによりかえって日蓮を師とせよという智学の戒めを守り，

智学の先に日蓮という原典へと遡っていく道筋をたどるものであったことが推定された．すなわち国柱会入会前後の賢治は，智学の導きに真摯に依拠しつつも，直情的に智学の説に付き従うのではない慎重な日蓮主義「受容」を示していたのである．

ここにさらなる課題として浮上するのは，賢治の日蓮主義「受容」はその後どのように展開していったのか，という問いである．賢治は 1920 年（大正 9）の国柱会入会前後には真宗の門徒であった家族や友人に強く改宗を迫ったものの，翌 1921 年（大正 10）夏頃にはそのような態度を見せなくなっていく．同年 12 月から約 4 年 4 ヶ月間に及ぶ農学校教師時代には，生徒たちに対して自身の信仰を説くことはほとんどなかったとされる．

とりわけ，これまでに賢治の実践や童話に見られる教育については，近代日本における管理や統制を強めた学校教育に対して，個性重視の人間教育を基本としたものであったことが評価されてきた[5]．このような賢治の教育と，田中智学による「教育勅語」の存在を重視し教育の大本を「忠孝国体の正義」[6] に基づくべきであるとする主張との結びつきを見出すことは一見して容易ではない．

ただし賢治自身は信仰態度の変容について明言はしておらず，農学校教師時代には，国柱会の機関紙『天業民報』に農学校の生徒に向けて作った歌曲の歌詞を投稿している．ここには，賢治が国柱会から距離を見せるようになったと単純には言い難い問題がある．この点については，先述したように，大谷栄一（2019）が示した日蓮主義と国家主義の関係は普遍主義と特殊主義を循環する重層的なものであったという見解を考慮に入れつつ，賢治の信仰のあり方と国柱会の主張の関係を丁寧にたどっていく作業が必要となるだろう．

そこで本稿では，1920 年（大正 9）から賢治晩年の 1933 年（昭和 8）頃までの時系列に沿って，国柱会と賢治の教育の捉え方がどのような点で異なり，重なっているのかを明らかにしていくことを試みる．国柱会に関す

る資料としては，国柱会の信行員であった賢治の手元に届いていた日刊新聞『天業民報』（創刊 1920 年・終刊 1931 年）とその後続紙である『大日本』（創刊 1932 年・終刊 1944 年）を手がかりとする．賢治については，当時の教え子や同僚による証言から浮かび上がる実践の様相と賢治のテクストを資料として用いる．

以下では，まず国柱会と『天業民報』『大日本』について概観し，次に賢治と国柱会の関わりを『天業民報』上の記事からたどり，両者の関係を考える上で必要となる課題を呈示する．それを踏まえた上で，1920 年（大正 9）から 1933 年（昭和 3）までの時期を賢治の活動ごとに三区分し[7]，賢治と国柱会の教育についての主張や実践を比較・検討する．最終的に，国柱会の主張では「国体的人格」の育成へ，賢治においては「農」を重視した「地　人」（空欄は賢治自身の表記に拠る）の道へと向かう方向性が示されていたことを論じ，両者は日蓮主義の教育思想が分化・展開する可能性を指し示すものであったことを指摘する．

一　国柱会と『天業民報』『大日本』について

まずは，前提となる国柱会とその機関紙『天業民報』『大日本』について概観する．田中智学の思想は，主には近代日蓮教学の摂折論（しょうしゃくろん）における体制追従的な護国思想に対する疑問と反発という形で形成されてきた．摂折論とは，日蓮仏教の「摂受（しょうじゅ）」と「折伏（しゃくぶく）」という二種の教化方法に関する教説である．摂受とは相手の善を受け入れ摂めとって徐々に導く立場であり，折伏とは相手の悪を指摘し屈伏させて正信に導き入れる立場である．近代以降の日蓮宗は摂受の立場をとる穏健主義へと傾いていたが，智学は折伏こそが祖師・日蓮の根本的立場であると考えた．そこで智学は 1879 年（明治 12）に還俗し，1880 年（明治 13）に蓮華会を結成して在家仏教運動を始め，1884 年（明治 17）には東京へ進出し立正安国会を設立，1914 年（大正 3）には国柱会を結成した．

摂折論に関しては，智学はさらに道徳的かつ国家的に発動すべきとする実行的折伏（行門の折伏）を強調するに至った[8]．この折伏主義を一つの特徴とする日蓮主義の定義について，智学自身は「日蓮聖人の遺文によりて帰納せらるゝ，日蓮聖人の思想と行動とを以つて，我等の思想及び行動の基準とするもの，此れ即ち日蓮主義である」と述べている[9]．ここに，日蓮遺文に依拠することを重視しつつ，内面的な信仰にとどまらずに生活意識や実際の社会的行動を志向する智学の日蓮主義の特徴を見ることができる．

国柱会（立正安国会）は機関誌や著書による文書伝道に力を入れており，1920 年（大正 9）9 月 12 日には国柱会初の日刊新聞として『天業民報』を創刊した．それは，萌え出づる新緑を思わせる緑色の紙で作られたタブロイド形式（4 面，後に 8 面構成）の新聞であり，創刊に際しては「評論又は指導若しくは解決の必要のある場合」を除き社会の出来事は報道しないとする特色が打ち出された[10]．そこで本紙には，智学の執筆記事や講演記録，会員の執筆記事，国柱会の動向，時事評論や社説などが載せられ，しばしば「文芸号」「政治号」「青年号」「信仰号」「婦人号」などの特集号が組まれた．1932 年（昭和 7）1 月より『天業民報』は『大日本』に改題されたが，新たな紙名には「日刊国紙」と付され，国体主義運動をより明確に打ち出そうとする意図が見られるものとなった．

ここで，両紙における教育に関する記事が主に依拠している，『天業民報』創刊以前よりあった智学の教育論を確認しておきたい．1904 年（明治 37），智学は文書伝道の一貫として，「教育勅語」を世界第一の貴重な経典であるとする『勅語玄義〔改題後：勅教玄義〕』（師子王文庫）を著した．1890 年（明治 23）の勅語発布以降，釈雲照『教育勅語の淵源』（1901 年）や井上円了『勅語玄義』（1902 年）など，仏教者や仏教哲学者による勅語衍義書が出されており，智学の著書もこうした流れの中で著されたものであった．

ただし，智学の『勅語玄義』は「教育勅語」の解説書にとどまらず，教育家をはじめ世の人々に「教育勅語」の深意が汲み取られていないことへの批判から始まっている．智学は，「教育勅語」の文底には，日本の皇室が君であるだけでなく父でもあるという「国体的忠孝」と，日蓮が示したとする国の成仏を以て人の成仏の大成とするという「国家的忠孝」の二つの忠孝が潜んでいるという．智学は，それらの忠孝を「全人類の最終帰着点」に据えることで，日本国体による世界の統一を目指すべきであるとする所論を展開したのであった[11]．

二　賢治と国柱会の事実的関係

（一）　『天業民報』上の賢治関係資料

賢治は，まさに『天業民報』創刊と時期を近しくして国柱会に入会した．以下では，賢治が国柱会に入会するまでの経緯と，国柱会との事実的な関係をたどっていく．

宮沢一族は，賢治の父・宮沢政次郎をはじめとして，清沢満之（きよざわまんし）に始まる浩々洞一派に属した暁烏敏（あけがらすはや）や，東京本郷の求道学舎・求道会館で知識人青年の感化に努めた近角常観（ちかずみじょうかん）など，真宗の近代化に努めた僧侶と積極的な交流を行った．賢治の仏教信仰は，伝統的な真宗の雰囲気だけではなく近代的な真宗の教えの中で育まれていったのである．

しかし賢治は，1914 年（大正 3）頃，島地大等編『漢和対照妙法蓮華経』（初版：明治書院，1914 年）との出会いをきっかけに，『法華経』信仰に目覚めていった．盛岡高等農林学校を卒業する 1918 年（大正 7）には，法華経行者としての生き方を強く述べるようになる[12]．その後賢治は，盛岡高等農林学校の研究生を終えた 1920 年（大正 9）の秋頃に，国柱会に入信した．翌年 1 月には家出・上京して国柱会の本部を訪ね，同年 8 月に妹・トシの病気の知らせを受けて帰郷するまで，出版社の仕事に就きながら国柱会の街頭布教や奉仕活動に従事した．後述するように，やがて賢治による

国柱会への積極的な関わりは記録的には残されなくなるが，晩年まで『法華経』信仰は貫かれた．

これまでに，賢治と国柱会の事実的な関係については，国柱会の機関紙『天業民報』上の記事をもとに調査されてきた[13]．以下に，これらの先行研究で指摘され，本稿の調査でも確認できた記事を整理していく．『天業民報』上に賢治の名前が初出するのは，1920 年（大正 9）11 月 30 日の 3 面に掲載された「「日蓮聖人の教義」を読みて信に入る」という，賢治の親戚で法友であった関徳弥（せきとくや）が智学に宛てた書簡を紹介した記事である．関はかねてより『法華経』を信仰しており，智学の著書を読み信心が堅固になってきたところ，「同町の宮沢賢治氏より（宮沢氏は信行部に入会いたし居り候）先生が御主催の会あるをきゝ知り」，国柱会への入会を決心したのだと述べている．

国柱会の会員には，主に信行員と研究員の二種があったが，この記事で言及されているように賢治は信行員として入会したのであった．大橋冨士子（1996）によれば，まずは研究員に入り，日蓮主義を研究し信仰修行が確立したら信行員に訂盟する規定となっていたが，教書を学び領解が進んでいる者には一躍信行員への入会が承認されたことがあったという[14]．賢治は智学の日蓮主義研究の導きに依拠し，日蓮主義の主な趣意を了解するための「達意的研究」から入り，さらに専門的な「組織的研究」へと進んでいったのであり[15]，その研究過程を認められ信行員として入会したと推定できる．

その後，賢治の名前は，1921 年（大正 10）11 月 15 日には 4 面に掲載された智学の還暦祝賀広告に，関徳弥など県内の協賛者 9 名とともに連名で記されている．1922 年（大正 11）9 月 24 日の 3 面には，「財団法人国柱会資成部　成立報告式彙報」という記事で，祝状を送った者の一覧の中に「岩手　宮沢賢治，同トシ」とある．同年 12 月 23 日の 3 面には，「国柱会資成部　第九回報告」の記事に，基本金の入金として「金壱百円也　岩手

宮沢賢治殿／（右ハ令妹登志子遺志ニ依リ）」とあり，賢治と妹・トシの関わりが見られる[16].

国柱会資成部とは，国柱会の講習会やその他の講演会・公演会，出版物刊行などの事業のために設置された財団である．具体的な目的としては，「国体開顕ノ正義ヲ宣揚」し，社会事業の振興により「報国盡忠ノ洪願ヲ資成」することにあるとされた[17]．国柱会信行員であり本財団に金品を寄附した者は「資成員」とされたため[18]，賢治は信行員にして財団の資成員でもあったことがわかる.

また，同年 12 月 6 日の 3 面に載せられた「妙高旅信」は，国柱会教職であった長瀧智大が青森や仙台，盛岡をめぐった旅記であり，花巻駅では「宮沢，関の両君に面し，関君は盛岡まで同車された」ことが示されている.

1923 年（大正 12）には『天業民報』上に賢治の名前が最も多く見られ，4 月 21 日には芸術伝道を銘打った国柱会の外郭団体・国性文芸会[19] への入会申込者一覧に「一口　岩手　宮沢賢治殿」と記載され，国性文芸会に所属したことが知られる．さらに次節で詳述するが，『天業民報』には同年 7 月から 8 月にかけての 4 回にわたり，賢治が農学校の生徒たちのために作った三つの歌曲（花巻農学校精神歌）の歌詞や「青い槍の葉（挿秧歌）」などの賢治作品が掲載された.

（二） 国柱会の活動の展開への着目

以上の記事からは，国柱会入会から 1923 年（大正 12）頃までの寄附や作品の投稿を通した，賢治による積極的な信行員としての活動を見て取ることができる．また 1926 年（大正 15）配布と推定される国柱会職員選挙の「被選挙人資格認定簿」には，「岩手県　宮沢賢治（三一）農学校教諭」の記述が見られ[20]，被選挙権を持つ会員としての所属が確認できる.

ただし現時点の調査では，『天業民報』上の賢治の名前は，1923 年（大正 12）11 月 27 日に，9 月の関東大震災を受けた「国難救護／正法宣揚同志結束義金報告」で「金拾円（救護）　岩手　宮沢賢治殿」と記述されて以後，見出せなくなる．上田哲（1988）が指摘するように，それ以降の国柱会による各種の運動への積極的な協力は，少なくとも記録的には残されていないのである[21]．

特に象徴的なのは，1930 年（昭和 5）に明治会の盛岡支部が設立された際にも[22]，その前後の明治会普及を掲げた東北での活動にも，『天業民報』上の活動報告に賢治は名を残していない点である．明治会とは，1925 年（大正 14）に結成された国体主義的運動を担った国柱会の外郭団体であり，非宗教団体であった[23]．本会は，明治節制定の請願運動をきっかけに，「明治天皇の盛徳を讃仰し，御偉業の大綱を服膺して，深大なる聖訓を実行普及せんとする同志の一大団結」[24] したものとして立ち上げられ，各地に支部が生まれていった．

明治会と国柱会の関係について，1928 年（昭和 3）に開かれた国柱会定期大会では，常任理事であった星野智融が以下のように語っている．「今，国柱会は，永年にわたつて為し来つた国諫運動的事業は，時勢に鑑み，挙げて新しき同盟団体たる明治会に移し，国柱会は専ら純宗教的事業に邁進することになつたのであります」[25]．もちろん，それぞれの会員や組織には重なりがあったはずであるが，宗教的事業を担う国柱会と国体主義的運動を担う明治会とで尽力する活動領域を棲み分けたのである．

ところで大谷栄一（2019）は，日蓮主義と国家主義の関係は一枚岩ではなく重層的なものであったこと，そして後続世代における日蓮主義の国家主義的性格の現れ方は，それぞれの解釈に依拠していたことを示していた．このことは，国柱会が外郭団体を複数設けて担当領域を区分したという，国柱会組織の重層的な構造とも関連する問題であると考える．

賢治が国柱会の外郭団体の中で入会したことがわかっているのは，芸術

伝道を担った国性文芸会のみである．政治活動を担った立憲養正会や，非宗教団体として国体主義的運動に力を入れた明治会や天業青年団において，賢治が活動したという記録は今のところ見つかっていない．賢治が国柱会から脱会した記録はないこと，一方で明治会などで活動した記録も見つかっていないことに鑑みれば，そこには，賢治による日蓮主義の解釈がどのような特質を持っていたのかを窺い知る手がかりがあると言えるのではないだろうか.

これまでの賢治研究では，賢治は国柱会の国家主義的性格に賛同したか否か，という二項対立図式の問いが立てられる傾向にあった．しかし，「日蓮主義＝国家主義」という図式を一枚岩のものとして自明視するのではなく，さまざまに展開し得る可能性を持った日蓮主義の思想を，賢治はいかに解釈し，展開させようとしたのかという観点を持つことが必要である．その上で，賢治の信仰のあり方と国柱会の活動の展開という変化していく両者の関係をたどっていくことが有効であると考える.

そこで次節以降では，1920 年（大正 9）から 1933 年（昭和 8）までの時期に沿って，国柱会と賢治の関係を対照させながら，国柱会機関紙と賢治の実践や作品に現れた教育に関する主張を比較していく．本稿では，賢治の活動と信仰態度の変容を関連づけて考えるためにこの期間を三つに区分する．具体的には，1920 年（大正 9）の国柱会入会から 1926 年（大正 14）3 月までの農学校教師時代を第一期とする．次に，国柱会との関わりが記録的には残されなくなった，私塾・羅須地人協会（らすちじんきょうかい）での活動が始まった 1926 年（大正 15）から，賢治が病に臥して活動を終えたと見られる 1928 年（昭和 3）までを第二期とする．最後に，肥料設計相談や文学作品の創作活動に努めながら東北砕石工場の技師となった頃から亡くなるまでの 1929 年（昭和 4）から 1933 年（昭和 8）までを第三期とする.

三　第一期：国柱会入会から農学校教師時代

まずは，1920 年（大正 9）～1925 年（大正 14）の国柱会入会から農学校教師時代に着眼する．先述したように，賢治は 1920 年（大正 9）の秋頃に国柱会に入信し，その頃には日蓮や智学を師とすることを明言している．たとえば，同年 12 月 2 日付の友人・保阪嘉内宛の書簡では，「田中先生に　妙法が実にはっきり働いてゐるのを私は感じ私は信じ私は仰ぎ私は嘆じ　今や日蓮聖人に従ひ奉る様に田中先生に絶対に服従致します．御命令さへあれば私はシベリアの凍原にも支那の内地にも参ります」[26] と述べている．また，智学の著書を紹介して国柱会入会を勧める書簡を友人に送るなど，熱心な会員としての活動の様子を見せている．では，この頃の国柱会ではどのような主張がなされていたのか，『天業民報』より確認していきたい．

（一）　国柱会：「勅教」を指針とした国体教育

当時，国柱会の信行員には，機関雑誌の配布については変遷があったものの，機関新聞は毎号送付されることとなっていた．賢治は国柱会入会当初には友人に『天業民報』の購読を勧めており，賢治自身もそれを目にしていたことがわかる．もちろん，新聞への寄稿者は田中智学に限らずその他の会員も含まれており，そこに見られる主張が全て同一の論調であったとは言い難い．ただし先述したように，『天業民報』創刊時に打ち出された特色として，紙面で社会的出来事を取り扱うのは，単なる報道ではなく評論もしくは指導・解決すべき場合に限られていた．したがって，本紙における教育に関する記事は，現実の教育界の動向に対する評論や改善策の主張であったという点で一つの方向性を示していたと言える．

『天業民報』が創刊された頃，すでに智学は本化妙宗の教学体系を完成させ，日蓮主義運動を「「あるべき日本」の実現による日本統合と世界統一の達成をめざすナショナリスティック（国家主義的・民族主義的）な宗

教運動」[27] として展開させていた．そこで『天業民報』上で主張されたのは，先述した智学の『勅語玄義（改題後：勅教玄義）』の所論を基盤とした「教育勅語」への着目であり，さらに「教育勅語」を「勅教」という名称に変更した上で世界に宣伝することであった．「勅教」に変更すべきであると考えた背景には，教育家の中には，「教育勅語」は学校の生徒に与えられた学校のみに関するものだと思っている者がいるため，より広い意味で取られるようにという意図があった．

智学は，1920（大正 9）年 10 月 27 日の記事「民意の粛清」で，「明治勅教」は国民的な経典であるだけではなく，「日本国体」を釈義した「世界公道の教範」，すなわち「「法華経」「論語」「バイブル」「コーラン」に比肩すべき世界的経典」であると主張している[28]．「勅教」に基づく教育は，『天業民報』上では「国体教育」と表現される．具体的には，国体主義――世界主義を含めた国家主義，ないしは国家主義に基づく世界主義とされる――を基盤に据えた教育が「国体教育」であると考えられた[29]．

ここには，智学が主張した「世界の道義的統一」の考えが色濃く根ざしていることは言うまでもない．智学が述べるのは，現実の日本とはまだ溝があるとされる，『法華経』によって開顕された理想的な「日本国体」による世界の統一である．日本国体による世界の統一は，武力に訴えるのではなく，また日本のためではなく世界の幸福を目的として行われるため，道義的な統一と言われる．したがって智学は，自身の主張は世間一般で言われるところの国家主義とは異なることを強調したのであった[30]．

また国柱会の論者たちは，日本国体研究および国体教育の機関を実際に作ることを提案している[31]．1922 年（大正 11）10 月 31 日 3 面の高知尾白瑞（国柱会理事・高知尾智耀の号）による記事「天下の教育家に御話し申す」では，日本の教育家が西洋の教育学者の言説を取り入れることに熱を入れてきた一方で，日本と世界の教育の根本原理である国体の道を示した勅教を重視してこなかったことが批判されている．しかし，日本には勅教

に基づく「特殊の学問と学制」があり[32]，これらを研究するための機関が必要だと述べたのであった．

さらに，『天業民報』上で主張された国体教育では，学問的知識の獲得ではなく，学問を運用する根本としての人間を作ることが目指されていた[33]．この点に関して国柱会教職の長瀧智大は，「国体の根の上に，信育道育の幹に知識芸能の花を開かせ，道義的世界統一といふ絶対平和の実を結ばせるのである」と示している[34]．学問的知識の根幹にある，「信育道育」によって育成される人間のあり方そのものが肝要であるとする論だと言えよう．

（二）　賢治：農学校教師としての自然科学の重視

賢治は，『天業民報』で勅教に基づく国体教育が説かれていたこの時期に，家出・上京から戻り，郡長と郡視学の話を受けて 1921 年（大正 10）12 月より稗貫郡立稗貫農学校（1923 年より岩手県立花巻農学校）の教諭を務めた．

先述したように，賢治は 1923 年（大正 12）に国性文芸会に入会し，『天業民報』に作品を寄稿した．同年 7 月 3 日の高知尾白瑞（先述した高知尾智耀）による記事「初夏の花巻より」では，岩手の花巻農学校で教鞭をとっている「宮沢君」より，同校で学生諸君が歌っている学生歌数章が送られてきたという紹介文とともに「花巻農学校精神歌」が掲載された．続いて 7 月 29 日には「角礫行進歌」が，8 月 7 日には「黎明行進歌」が掲載されたが，これらは題名の後に「(花巻農学校精神歌)」と付されたように，賢治が農学校の生徒たちのために作った歌曲の歌詞である．当時の教え子によれば，賢治は精神歌について，公的な校歌というよりも「農民といふものを，主体として作つたものだから」と述べたという[35]．

これらの歌詞の中には，『法華経』信仰の色彩を見てとることができる．たとえば「角礫行進歌」には「稜礫の　あれつちを，／やぶりてわれらは

きたりぬ」[36] という，『法華経』従地涌出品で説かれる，大地が裂けて無数に湧き出てくる「地涌の菩薩」を想起させる言葉が見られる．地涌の菩薩は，現実世界に常住して利他の修行に努める『法華経』独自の存在である．また，「黎明行進歌」には「いま角礫のあれつちに／リンデの種子をわが播かん」[37] という言葉が見られるが，これは日蓮や智学が重視した，仏が仏種を衆生の心田に植える「下種益」を思わせるものと言える．

こうした表現からは，歌曲を通して，現実世界で行われる利他的な実践である菩薩行を重視する『法華経』的な精神を生徒たちに授けようとする賢治の意図を看取することができる．賢治が精神歌を『天業民報』に寄稿したのは，芸術を通した感化という国性文芸会の方針に共鳴していたからであったと考えられるが，『法華経』の精神に農業や農民の存在を重ね合わせたところに賢治の思想の特徴が認められると言えるだろう．

また，国柱会の主張では学問的な知識以上に「信育道育」が強調されていたのに対して，賢治は知識の教授にも比重を置いていた．農学校での賢治は，関東地方を中心に書かれた教科書を用いずに，土壌学などは原著を用いて，花巻地方の土性や気候に基づく農業教育を施していた．しばしば賢治は，授業の合間や試験時に肥料設計などの応用問題を出し，「これは実際問題ですよ，実際問題です．まづ考へてごらんなさい」と述べたという[38]．賢治の実践で重視されていたのは，実際の生活の中で生かされる自然科学的な知識の教授であった．

ただし賢治には，自然科学的な知識を授けることを重視した上で，それに基づく東北農村の新たなあり方についての理念を掲げる側面があった点には注意すべきである．花巻農学校はもともと二年制の乙種であり，自小作農や小自作農など中農程度の子弟（その半数以上は二，三男）が入学してきたが[39]，彼らの多くは卒業後には農業に従事せずに代用教員や役所勤めとなっていたのが実態であった．賢治はこうした実態を前に，生徒たちに向けて学校で学んだことを隣近所の農家に教えてほしいと述べ[40]，長男

には農家を継がせ，二，三男には何らかの技能や職業を与えることによって，「ともに希望に満ちた明るい農村を築いていきたい」と伝えていた[41].

以上に見てきた 1920 年（大正 9）～1925 年（大正 14）の中で，賢治にとって転機となったのは，農学校教師を務めたことによる東北農村の実情を目の当たりにする経験ではなかったか．賢治は農学校教師となったことで，自然科学的な農業の知識の教授と，それに基づく農村の改良へと明確に眼差しを向け変えていったのではないかという仮説が考えられる．ただし賢治は，国柱会入会直後には智学や日蓮への強い信奉を見せ，農学校での教育活動の一環であった自作の歌詞を『天業民報』に寄稿していた．「勅教」に基づく「国体教育」とは，農村や自然科学への眼差しという点では相違が見られるが，現実世界を改良する理念を掲げたり芸術による感化を重視したりする側面については，賢治への日蓮主義の影響を無視することはできない．

四　第二期：羅須地人協会時代

次に，1926 年（大正 15）～1928 年（昭和 3）にわたる羅須地人協会時代に焦点を当てていく．賢治は 1925 年（大正 14）4 月 13 日付の書簡で，「わたくしもいつまでも中ぶらりんの教師など生温いことをしてゐるわけに行きませんから多分は来春はやめてもう本統（ママ）の百姓になります．そして小さな農民劇団を利害なしに創ったりしたいと思ふのです」[42] と述べ，翌 1926 年（大正 15）3 月末には農学校を依願退職した．その後，独居自炊生活をはじめ，私塾・羅須地人協会での活動へと乗り出していった．

（一）　国柱会：建国の「三綱」に基づく国家有用の人材

この時期に『天業民報』上でとりわけ強調されていたのは，先の「国体教育」をさらに具体化した，国家有用の人材を作るための教育である．この主張のきっかけとなったのは，1928 年（昭和 3）の三・一五事件に代表

される共産主義や社会主義の問題であったが，国柱会の論者は，知識人青年たちの赤化は今日の学校教育が及ぼした弊害であるとする[43].

そこで主張するのは，日本国体の観念を「信念化」する必要性である．1928 年（昭和 3）4 月 7 日の記事「教育実際化の諸政策」によれば，青少年たちが学校で知識を注入されたとしても，日本国体の観念が信念化されていなければ国家・社会のためにそれを有意義に応用することはなく，彼らはプチブルジョワたる個人主義者となるか，失業すればマルクス主義者となって国家の存在を呪うようになるという[44]．すなわち，『天業民報』で述べられる国家有用の人材とは，国体教育によって日本国体の観念を信念化し，学校で得た知識を国家に有意義に応用し得る日本国民のことを意味すると言える．

『天業民報』上には，1928 年（昭和 3）の文部省による思想善導に向けた教育改善計画に対する意見も掲載された．この記事によれば，文部省の計画案では学校教育施設については「精神科学の研究奨励」「日本文化，東洋文化の講座設置」「学生生徒訓育」などが，社会教育施設については「思想講座，思想講演会の開設」「思想善導映画の製作並に普及」「思想講習会の開催」などが掲げられた．この案に対して『天業民報』では，自然科学を偏重してきたことによる弊害に鑑み，精神科学の研究を奨励して唯物思想に対抗すると同時に，日本文化や東洋文化を中核に置くものであるという肯定的な評価がなされている[45].

しかし『天業民報』では，文部省の改善案を肯定的に見つつも，「吾等から見れば肝心の魂がまだ確然と定められて居ないやうに思はれる」として，そこに不十分な部分のあることが指摘される．元来の教育では，智育・徳育・情育を併行させてきた点に問題があり，すべて一つの人格を養成するものとして融合せられるべきであるという批判である[46].

ここで，智学が主張してきた「日本建国の三大綱」（三綱）による世界統一という説との結びつきがなされる．智学は，『日本書紀』の中の語句で

ある「積慶」「重暉」「養正」（三綱）に，それぞれ「道徳」「文化」「正義」という意味を込め，「積慶」（道徳）と「重暉」（文化）を世界中に普及していく「養正」（正義）こそが日本建国の目的であると考えた[47]．そして『天業民報』上の教育に関する論では，積慶は情育，重暉は智育，養正は徳育の淵源であるとされる．この三綱に基づき「勅教」を指針とすることで，日本国民の人生観が確固たるものとなるのだという[48]．すなわち，『天業民報』の論では，赤化対策として思想善導に力を入れる文部省の案を肯定的に見つつも，「三綱」や「勅教」を基盤に置くことをより徹底的になすべきことが強調されたのである．

（二）　賢治：「農民（地人）芸術概論」へ

一方で，大谷栄一（2019）が賢治は他の日蓮主義者が関心を持った「国家と宗教」の関係ではなく「個人―国土―世界」の問題に注意を払っていたと述べるように[49]，賢治の言葉には国家や国民の存在を強調する側面はあまり見られない[50]．羅須地人協会の活動の理論的根拠をなしていた「農民芸術」論三部作（「農民芸術概論」「農民芸術概論綱要」「農民芸術の興隆」）のうち，「農民芸術概論綱要」の「序論」には，以下の言葉が見られる．「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない／自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する……正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである」[51]．ここでは，宇宙への広がりを持つ世界全体の幸福が目指されつつも，国家という媒体が持ち出されることはなかった．

むしろ，この頃より賢治が強調したのは，協会名に見られる「地人」という言葉であった．「農民芸術」論は，賢治が退職する直前，1926 年（大正 15）1 月から 3 月にかけて農学校に併設された岩手国民高等学校で担当した講義「農民芸術」を下書きとしている．このとき受講した生徒が残したノート「講演筆記帖」には，「農民（地人）芸術概論」という講義名が記

され，冒頭では「農民と云はず地人と称し／芸術と云はず創造と云ひ度いのである」と定義されている[52]．さらに羅須地人協会の講義では，「地人芸術概論」という講義名が付され，「地人」という言葉を用いることで農民を新たに定義しようとする賢治の意図が窺える．

賢治が用いた「地人」という言葉の由来については諸説あるが，佐藤成（1984）の整理から抽出すれば，内村鑑三『地人論』（旧題『地理学考』）の影響を見る説や，先述した花巻農学校精神歌にも見られた，地面より湧き出てくる「地涌の菩薩」を指すものとする説などが挙げられる[53]．前者に関連して加藤碩一（2015）は，賢治の地人論の背景にあった，明治期から大正期にかけての地人論（人文地理学）と地文学（自然地理学）の文脈で用いられた「地人」や「地と人」という語の広まりを指摘している[54]．

こうした時代的背景に基づきつつも，賢治の「地人」という語は，彼による農民芸術の定義と深く関わるものであった点は着目すべきであろう．賢治は「農民芸術概論綱要」の中で，「農民芸術とは宇宙感情の　地　人　個性と通ずる具体的なる表現である」[55] と述べている．この部分は，国民高等学校での講義における「農民芸術とは宇宙精神の地人の個性を通ふ（ママ）ずる具体的な表現である」[56] という箇所と対応している．

賢治の掲げた農民芸術とは，宇宙感情という普遍的な存在を想定しつつも，それが地人の個性を通して表れるとする「個」を重視したものであった．さらに賢治が「地　人」というように「地」と「人」の間に空間を設けて表現したことには，当時の地人論や地文学を背景として，人間が地と共に生きる存在であることを強調する意図が看取される．賢治の主張や実践は，世界（宇宙）という普遍への志向を掲げる点では国柱会の論と重なりを見せているが，特殊主義に傾く国家という媒体を用いずに自然や「地」を重視したところに独自性があったと言えるかもしれない．

実際に賢治が羅須地人協会で行った活動については，賢治が会員に配布したいくつかの資料が重要な手がかりとなる．謄写版刷りの集会案内に

は,「農業全体に巨きな希望を載せて，次の仕度にかかりませう」という呼びかけとともに,「われわれはどんな方法でわれわれに必要な科学を／われわれのものにできるか　一時間／われわれに必須な化学の骨組み　二時間」（傍点原著）を具体的に試みることを示している[57]．また 1927 年（昭和 2）に配布された「講義案内」では，1 月から 3 月にかけて 7 回にわたる講義計画が組まれている．各講義は,「農業ニ必須ナ化学ノ基礎」に始まり,「土壌学要綱」,「植物生理要綱」の上部と下部,「肥料学要綱」の上部と下部,「エスペラント　地人芸術概論」となっている[58]．

「土壌学要綱」の講義では,「働く都度必要とする土壌の概念をはつ切り知つて居ると居ないとでは農業を経営するのにどんなに大きな相違を来すか知れません」と述べ,「土壌用務一覧」のプリントを配って図解・解説したという[59]．『天業民報』上では，自然科学に偏重した智育にのみ力を入れてきた学校教育への批判が見られたが，賢治は農村で必要とされる自然科学を農民たちの生きる文脈に合わせて活用しようとしていたと言える．

それと同時に，協会での活動は「地人芸術概論」に見られるように理念への志向性を持つものであった．講義「エスペラント　地人芸術概論」に関連して，賢治は 1926 年（大正 15・昭和元）12 月にチェロを持って上京し，上野図書館やタイピスト学校に通ったり，チェロやオルガンの楽器を習うほかにエスペラント語の学習をしたり，自身の勉強に力を入れていた．このことについて賢治は父宛書簡の中で，これらは「遊び仕事」ではないことを訴え，得た材料を「みんな新しく構造し建築して小さいながらみんなといっしょに無上菩提に至る橋梁を架し，みなさまの御恩に報ひやうと思ひます」と展望を示している[60]．

『天業民報』と賢治の主張では，国家の存在を強調するか否かという違いは従来も指摘されてきた点であるが，両者の教育の向かう方向性に相違が生じていることは改めて着目すべきと考える．『天業民報』で主張されていたのは「国体教育」に基づく国家有為な人材を作ることであったが,

賢治の実践には人材を作ろうとする意図は見えない．むしろ賢治自身が学び続け，得たものを農民に還元することで，自然に向き合いながら大地とともに生きる「地　人」という存在を呈示する姿を見てとることができるように思われる．

五　第三期：病臥から東北砕石工場技師，晩年にかけて

最後に，1929 年（昭和 4）から 1933 年（昭和 8）の賢治晩年にかけての時期を検討していく．羅須地人協会は，賢治が 1928 年（昭和 3）8 月に過労により病臥，12 月には急性肺炎となったことにより，活動が中断されたと見られている．1929 年（昭和 4）にはやや病状が回復し，賢治は 1931 年（昭和 6）2 月より東北砕石工場の技師となり，宣伝販売を受け持った．この時期にも童話「グスコーブドリの伝記」を雑誌『児童文学』に発表したり，それまでの作品を文語詩に改作したりするなど創作活動は続けられていた．

（一）　国柱会：「国体的人格」の育成

その頃の『天業民報』に通底しているのは，引き続き，青年たちのマルクス主義あるいは諦念的な思潮への流れを今日の学校教育が然らしめたものであるとし，その改善を求める論調である．論者たちは，あるべき教育のあり方として国家有用の人材を作ることを掲げ，さらにそれを「国体的人格」の育成という言葉で表明していく．

1930 年（昭和 5）8 月 24 日掲載の智学談「日本政治の将来（八）」では，教育は有用な人材を作るためのものであり，今日の教育は根本刷新されるべきであると主張されている．智学は，人材の根本は人格であり，人格的存在としての人物を作ることが肝要であるという．そこで実行すべきは国民精神を養う教育であるとされたが，智学はその先に日本国民の持つ特殊な使命が果たされること，すなわち平和のための世界統一の実現を眼差し

た[61].

智学の高弟・山川智応は，こうした智学の説を受け継ぎつつ，教育の精神とは「建国の三綱」（「積慶」「重暉」「養正」）に基づく「国体的人格を育成すること」であらねばならぬと強調する．その上で具体的に，国体的信念を養うためには，建国三綱についての内容を小学読本や歴史，修身等の教科書に入れるべきことなどを提案している[62].

彼らの主張は理念にとどまらず，明治会の主催による国体教育少年講習会が開催されている．本講習会では，明治天皇の教えである日本国体の観念に，日本国民のみならず世界人類が集まり来らねばならない，といった内容が教えられた[63]．このように現実の教育に改善を求め，対案の提出にとどまらず具体的な実践に向かっていくところに，「実現の宗教」[64] としての日蓮主義の特徴を見ることができる．

また，「国体的人格」の育成としての教育は，「矯正」や「啓発」[65] などという言葉に見られるように，人間を正導すべきであるという発想に基づいて語られた．1933 年（昭和 8）3 月 22 日と 24 日に掲載された「教育改造の必然性」という記事では，ダルトン・プランやウィネトカ・プランなどの自由や個性の尊重を掲げる新教育への批判が見られる．論者は，これらはただ自由に児童を発展させることに努めるものであり，どのような社会を創造するかについてはあらかじめ決定できず，児童を何らの「正導」なしに発展させたところでいかなる人物ができ上がるのか，と懐疑的な眼差しを向ける[66].

さらに同年 8 月 13 日の長瀧智大による記事では，日蓮主義の教育では，一人一人を救ったり導いたりするのは次いでのことであり，主な目的は「国家の開導」にあることが示される．長瀧は，「個人の成仏を願はずして国の成仏を欲求する」と明瞭に述べるのである[67].

以上をまとめれば，『天業民報』『大日本』上の主張に見られる教育とは，精神的根拠や指導原理を明確に「教育勅語」に置き，それに基づき「正導」

することで国体的人格を育成するものであったと言える．教育は個々人を導くためにあるのではなく，「国家の開導」を主眼に据えるものであり，その最終的な目的は日本国体による世界統一とされたのであった．

（二） 賢治：個々の幸福への願い

賢治による農村改良を目指した実践は，現実社会を改善するために社会事業を行うという国柱会の発想への共鳴によるところが大きかったことは確かであると考える．松岡幹夫（2015）が指摘するように，賢治の「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」（「農民芸術概論綱要」）という言葉は，智学による「一切衆生と共に本に帰るにあらざれば，自己の成仏も畢竟は決定しないのである」[68] と同質的な主張を有している．賢治の宇宙論的な共生倫理は，日蓮の一切衆生救済への念願を受け継いだ智学の言説との共有点を持つと言える[69]．

このことは，「農民芸術概論綱要」には「〈個性の伸長〉と〈世界全体の調和〉の止揚」[70] が見られると言われてきたように，世界を志向すると同時に個の存在が重視されるという特徴に関しても言える．木村直弘（2020）の論考が指摘するように，智学は道義的な世界統一を述べる際に，個は多様なままに統一されるという論理を提示しているからである[71]．日蓮や智学によるあらゆる生物の成仏という発想に加えて，智学による個の多様なあり方を認める視点は，賢治の主張との重なりを見ることができる．

さらに国柱会からの賢治への影響は，1931 年（昭和 6）10 月上旬から翌年初め頃まで使用したと推定される「雨ニモマケズ手帳」にも残されている．賢治の信仰上の悲願や反省等が記されたこの手帳の中には，日蓮の文字曼荼羅や，1921 年（大正 10）の上京時に国柱会理事・高知尾智耀から「法華文学ノ創作」の奨めを受けたことが記されている[72]．これらの記述については，芸術と信仰の関係からより精緻に検討する必要があるが，国柱会から得たものは賢治の中で晩年まで生かされていたことが窺える．

しかし，本稿で検討してきた教育論という観点から捉えれば，賢治の実践や主張には，『天業民報』や『大日本』の論理と異なる側面が見られる．国柱会の機関紙では，自然科学への偏重が批判された上で信育や道育が強調され，一つの理念へと向かわせる矯正や正導という考えのもと，「国家の開導」を第一に据え個人の成仏は副次的に行うとする論が展開されていた．このような論理と対比させたとき，賢治の場合には，世界全体の成仏を掲げつつも一人ひとりの幸福への願いがより鮮明に表れていると見え，さらにその実現に向けては自然科学的知識の教授を重視するという特徴が浮き彫りになってくる．

実際に，賢治が羅須地人協会時代以降に行った肥料設計や稲作指導は，個々人の生に寄り添うものであった．1928 年（昭和 3）3 月の賢治の肥料設計については，耐冷性があり食味も良い稲の品種「陸羽 132 号」が奨励されたこと，それによって設計された人々のところでは，おおよそ 2 割の増収を得たことが証言されている[73]．また賢治は，盛岡高等農林学校で学んだ土壌学の知識や，指導教授であった関豊太郎の見解をもとに，炭酸石灰による酸性不良土の改良に努めた．1931 年（昭和 6）2 月から始まった東北砕石工場の技師としての活動は，石灰岩末を「肥料用炭酸石灰」の名称を用いることで肥料として普及させるものであった．石灰はアルカリ性であり，酸性の土壌を中和することができるからである[74]．

賢治の宇宙論的共生倫理では，智学の言説と共有点を持ちつつも，自然科学の知識を重視したことにより生命の連鎖や循環という自然観が重ね合わされ，「農」の営みへと向かう道が拓かれていく．「農民芸術概論綱要」に記された「地　人」という言葉には，「地」と「人」の両者に重きを置く意図を窺うことができる．賢治が述べた「地　人」とは，生命の循環する自然（地）とともに生きる一人ひとりのあり方を示したものと考えられる．先述したように，賢治の日蓮主義研究は，智学のさらに先に日蓮や『法華経』という原典に遡っていくものであった．その過程で賢治が日蓮

主義の中に見出していったのは，特殊主義へと傾く国家の強調よりも，普遍的な志向を有する「農」に通ずる思想だったのではないだろうか.

ただし，国柱会の教育論が，機関紙のみから読み取られる国体的人格の育成に留まるものであったと単純に言い切ることはできない．大地に根ざして生きる「農」の思想，ないしは「農」を通した理想郷の実現という発想は，そのほかの日蓮主義の影響を受けた人々の中にも見られたものであったからである[75]．日蓮主義には，現実の国家の支配体制や国体論的ナショナリズムを正当化する特殊主義的な側面とともに，あるべき日本や世界の実現に向けて実践を促す，現実の国家を超越した価値を付与する普遍主義的な側面があった．すなわち，日蓮主義を教育思想という観点から見たとき，そこには複数の分化・展開する可能性が含まれていたことを考慮せねばならない.「国体的人格」の育成へと向かう方向性と「地　人」という存在の呈示へと向かう方向性は，その可能性を指し示すものであったと言えよう.

おわりに

以上，賢治が国柱会に入会した 1920 年（大正 9）から晩年の 1933 年（昭和 8）までを三つの時期に区分し，賢治の実践やテクストと国柱会の機関紙『天業民報』『大日本』を手がかりに，両者の教育のあり方を比較してきた．最後に各節で明らかになったことを概観し，今後の課題を示したい.

まず，第一期とした 1920 年（大正 9）～1925 年（大正 14）にわたる国柱会入会から農学校教師時代では，国柱会の側では「勅教」を指針とした国体教育が唱えられており，それは学問的知識以上に「信育道育」によって形成される人間のあり方を強調したものであった．他方で賢治は，農学校教師を務めたことにより農村の実情を目の当たりにし，自然科学に基づく知識の教授に比重を置いたが，賢治の言葉には理想的な農村のあり方を呈示する理念的な側面が示されていた.

次に，第二期とした 1926 年（大正 15）～1928 年（昭和 3）にわたる羅須地人協会時代では，国柱会では現実の学校教育に対して，教育は国家有用の人材を育成するものだという主張が展開されていた．それは，「建国の三綱」に基づく国体教育を授けることによる，学校で得た知識を国家社会のために活用し得る人材（日本国民）の育成であった．羅須地人協会を立ち上げた賢治においては，国家という共同体や人材の育成という発想は見られず，自然と共に生きる「地　人」への道が眼差されるようになっていった．

そして第三期とした 1929 年（昭和 4）から 1933 年（昭和 8）の病臥から晩年にかけての時期では，国柱会ではそれまでに主張されていた国体教育の目的が，「国体的人格」の育成にあることが明示されていった．それは，個々人を導くことよりも国家の開導を第一義とし，最終的には世界の道義的統一を目的に据えるものであった．対して，「地　人」という存在を呈示した賢治の教育は，より個々人の生に寄り添うことを重視したものであった．しかし同時に，理念へと向かう実現への志向は国柱会の主張との共有点を持つものであり，日蓮主義の思想にも自然と共に生きる「農」への道に展開する可能性はあり得たのであった．

では，日蓮主義の影響を受けた人々による，ひいては農本主義へと連なる発想と，賢治の実践や思想はどのように交錯し，あるいは異なるのか．「農」の道へと連なる方面での日蓮主義の教育思想の展開を探るには，日蓮主義の影響を受けた人々が行っていた実践や言説をより広く見ていく必要があるだろう．また賢治に関しては，労農党との事実的な関わりを踏まえ，農本主義的な発想のもとでしばしば行われた塾風教育と羅須地人協会での活動との比較を行っていかねばならない．次なる課題は，この問題の探究を通して，東北農村という実情の中で賢治が『法華経』や日蓮主義に依拠することはどのような意味を有するものであったのか，という農村の実態と信仰の関係を解明していくことである．

【附記】本稿は，日本学術振興会特別研究員奨励費（JP21J13359）の助成を受けたものです．そして，本稿で用いた史料閲覧にあたり，宗教法人国柱会の皆様に多大なお力添えをいただきました．末尾になりましたが，ここに深く感謝申し上げます．

凡例

宮沢賢治作品や書簡の引用は『新校本宮澤賢治全集』全 16 巻・別巻（筑摩書房，1995～2009 年）に依拠し，註では姓・巻・篇・頁数を次のように表記した．例：宮沢 2 本文篇，133 頁．

註

[1] 田中智学や国柱会については，田中芳谷『田中智學先生略傳』（師子王文庫，1974 年），大谷栄一『近代日本の日蓮主義運動』（法蔵館，2001 年），同『日蓮主義とはなんだったのか―近代日本の思想水脈』（講談社，2019 年），松岡幹夫『日蓮仏教の社会思想的展開―近代日本の宗教的イデオロギー』（東京大学出版会，2005 年），西山茂『近現代日本の法華運動』（春秋社，2016 年）等を参照した．

[2] 大谷や松岡，西山の前掲書のほか，末木文美士『思想としての近代仏教』（中公選書，2017 年）等．

[3] 大谷，前掲，『日蓮主義とはなんだったのか―近代日本の思想水脈』や，昆野伸幸「近代日本の法華経信仰と宮沢賢治―田中智学との関係を中心に」（『文芸研究』163，日本文芸研究会，2007 年 3 月），松岡幹夫『宮沢賢治と法華経―日蓮と親鸞の狭間で』（昌平黌出版会，2015 年）等．

[4] 深田愛乃「宮沢賢治の日蓮主義「受容」―『摂折御文／僧俗御判』の分析を通して」（『近代仏教』29，日本近代仏教史研究会，2022 年 5 月）．

[5] 荒川紘『教師・啄木と賢治―近代日本における「もうひとつの教育史」』（新曜社，2010 年），5 頁．

[6] 田中智学『勅語玄義』（師子王文庫，1905 年：初版は 1904 年），21 頁．

[7] 三区分については後述する．

[8] 智学の摂折論は田中智学『本化摂折論』（師子王文庫，1902 年）に詳しい．

[9] 「日蓮主義と現代思想」（『開顕』4（5），開顕発行所，1923 年 5 月），9 頁．

[10] 田中智学「天業民報創刊に就て種々の告白」（『天業民報』1920 年 9 月 26 日），1 面．

[11] 田中，前掲，『勅語玄義』，29～40 頁．

[12] たとえば 1918 年（大正 7）2 月 2 日付の父宛書簡等（宮沢 15 本文篇，45～47 頁）.

[13] 上田哲『宮沢賢治―その理想世界への道程 改訂版』（明治書院，1990 年），宮沢 16（下）補遺・伝記資料篇.

[14] 大橋冨士子『宮沢賢治 まことの愛』（金剛出版，1996 年），68 頁.

[15] 深田，前掲，「宮沢賢治の日蓮主義「受容」―『摂折御文／僧俗御判』の分析を通して」，67～70 頁.

[16] また，国柱会の典礼をまとめた『妙行正軌』に則って賢治がトシの追善供養を行ったとする指摘がある（牧野静「宮沢賢治における追善」『宗教研究』94（3），日本宗教学会，2020 年 11 月）．なお，1923 年 6 月 7 日付の『天業民報』には，「国柱会資成部　第二十三回報告」の記事に，「無指定寄附」の入金として「金拾圓也　岩手　宮沢政次郎殿」という記述が見られる.

[17] 資成部の寄附行為の目的は，「天照大神，神武天皇，聖徳太子，日蓮聖人，明治天皇ノ遺訓ヲ体シ，国体開顕ノ正義ヲ宣揚シ，学藝社会其他益世ノ為メニ適切ナル諸般ノ事業ヲ振興シ，ヨリテ国民思想ノ善導ヲ図リ，社会文化ノ向上ヲ促シ，報国盡忠ノ洪願ヲ資成スル」こととされた（『天業民報 報道号 第五報』1922 年 12 月，2 面）．なお，第 9 回報告における基本金寄附の内訳は，140 円（1 人），100 円（賢治含む 3 人），40 円（1 人），20 円（2 人・うち 1 人は 2 回目の寄附），10 円（1 人）となっており，賢治の寄附額は平均よりやや多い程度であったことがわかる.

[18] 財団の会員は寄附金の額に応じて，信行員については「特別資成員」「資成員」，研究員と協賛員については「特別賛成員」「賛成員」があった（『天業民報 報道号 第五報』，4 面）.

[19] 本会の前身は，1921 年（大正 10）に新劇の舞台俳優であった加藤精一が提案し田中智学の協力を得て始まった国民劇研究会であった（星野梅耀「国民劇研究会について」『開顕』1（11），開顕発行所，1921 年 11 月，83～90 頁）．智学は 1922 年（大正 11）1 月，「芸術の霊化」を掲げ，国民劇研究会を改組して自身が主宰となり国性文芸会を設立した.

[20] 宮沢 16（下）補遺・伝記資料篇，350～357 頁.

[21] 上田，前掲，『宮沢賢治―その理想世界への道程 改訂版』，74～75 頁.

[22] 「盛岡支部誕生」（『天業民報』1930 年 8 月 2 日），3 面.

[23] 明治会の沿革については，大谷，前掲，『近代日本の日蓮主義運動』，344～394 頁を参照.

[24] 「明治会の要旨」（『天業民報』1927 年 9 月 25 日），15 面.

[25] 「昭和三年度　国柱会定期会員大会　会議録」（『天業民報 特別付録』1928 年 10 月 23 日），1 面.

[26] 宮沢 15 本文篇，196 頁.

[27] 大谷，前掲，『近代日本の日蓮主義運動』，4 頁.
[28] 「民意の粛清」（『天業民報』1920 年 10 月 27 日），1 面.
[29] 「国体教育を興せ」（『天業民報』1921 年 7 月 21 日，1 面）や「国体教育の急要」（『天業民報』1922 年 10 月 31 日，2 面）等.
[30] 田中智学『日蓮主義教学大観』（師子王文庫，1925 年：真世界社 1993 年復刻版を使用）第 2 巻，594 頁．本書は，1904 年（明治 37）から 1910 年（明治 43）にかけて『妙宗式目講義録』の題で刊行され，1917 年（大正 6）に『本化妙宗式目講義録』と改題，さらに 1925 年（大正 14）に『日蓮主義教学大観』と改題・再刊された.
[31] 「〔天業時談〕何故に日本国体研究及び国体教育の機関を作らざる」（『天業民報』1924 年 12 月 12 日），1 面.
[32] 敷矢三郎「学制私見（一）」（『天業民報』1923 年 12 月 26 日），2 面.
[33] 増永浩「刻下の教育問題」（『天業民報』1923 年 11 月 9 日），1 面.
[34] 長瀧智大「教育制度の根本義（上）」（『天業民報』1921 年 9 月 28 日），1 面.
[35] 鈴木操六「先生と音楽」（『農民芸術』1，農民芸術社，1946 年 5 月），28 頁.
[36] 「角礫行進歌」（『天業民報』1923 年 7 月 29 日），3 面.
[37] 「黎明行進歌」（『天業民報』1923 年 8 月 7 日），3 面.
[38] 平来作「ありし日の思い出」（草野心平編『宮沢賢治研究』十字屋書店，1939 年），35 頁.
[39] 1923 年度『岩手県花巻農学校一覧表』.
[40] 『花農九十周年記念誌抄』（岩手県立花巻農業高等学校同窓会，1996 年），55 頁.
[41] 小原忠「早春の追憶」（村井勉編『宮澤賢治研究』2，農民芸術社，1948 年 10 月），12 頁.
[42] 宮沢 15 本文篇，226 頁.
[43] 武智一一「教育三歎」（『天業民報』1927 年 12 月 18 日，14 面），増田浩「現代教育とその転向」（『天業民報』1928 年 5 月 13 日，6 面）.
[44] 「教育実際化の諸政策」（『天業民報』1928 年 4 月 7 日），1 面.
[45] 「文部省の教育改善計画について」（『天業民報』1928 年 6 月 30 日），1 面.
[46] 「〔天業時談〕教育は人生観を與ふるを要す」（『天業民報』1928 年 7 月 17 日），1 面.
[47] 大谷，前掲，『近代日本の日蓮主義運動』，138 頁.
[48] 前掲，「〔天業時談〕教育は人生観を與ふるを要す」，1 面.
[49] 大谷，前掲，『日蓮主義とはなんだったのか―近代日本の思想水脈』，312 頁.
[50] 「大礼服の例外的効果」では，「富沢」による「校長さんが仰るやうでないもっとごまかしのない国体の意義を知りたいのです」という言葉が出てくるが，国体の内実について詳しくは語られておらず検討の余地がある（宮沢 12 本文篇，288 頁）.

[51] 宮沢 13（上）本文篇，9 頁.
[52] 宮沢 16（上）補遺・資料篇，192 頁.
[53] 佐藤成編著『宮沢賢治―地人への道』（川嶋印刷，1984 年），378～384 頁.
[54] 加藤碩一「宮沢賢治と「地人論」考」（『賢治研究』125, 宮沢賢治研究会, 2015 年）.
[55] 宮沢 13（上）本文篇，11 頁.
[56] 宮沢 16（上）補遺・資料篇，196 頁.
[57] 宮沢 14 本文篇，88～89 頁.
[58] 同前，90 頁.
[59] 伊藤忠一「地人協会の思い出（三）」（『イーハトーヴォ 第一期』8，1940 年 6 月），4 頁.
[60] 宮沢 15 本文篇，240 頁.
[61] 「日本政治の将来（八）」（『天業民報』1930 年 8 月 24 日），4 面.
[62] 山川智応「教育の目的と精神と方法の確立（下）」（『大日本』1932 年 4 月 29 日），1 面.
[63] 「少年教育の根本義（四）（田中巴之助先生講述）」（『大日本』1933 年 9 月 8 日），2 面.
[64] 西山茂「日本の近・現代における国体論的日蓮主義の展開」（『東洋大学社会学部紀要』22（2），東洋大学，1985 年 3 月），188 頁.
[65] 「日本政治の将来（八）」（『天業民報』1930 年 8 月 24 日），4 面.
[66] 片岡武雄「教育改造の必然性」（『大日本』1933 年 3 月 22 日・24 日），4 面.
[67] 長瀧智大「日蓮聖人の教育観（下）」（『大日本』1933 年 8 月 13 日），2 面.
[68] 田中智学『日蓮聖人乃教義』（真世界社，2004 年復刻版：初版は師子王文庫，1907 年），501 頁.
[69] 松岡，前掲，『宮沢賢治と法華経―日蓮と親鸞の狭間で』，209 頁.
[70] 大塚常樹「農民芸術概論綱要」（『国文学解釈と鑑賞』51（12），至文堂，1986 年 12 月），140 頁.
[71] 木村直弘「宮澤賢治〈多様ノ統一〉への志向（補説）―童話「ビヂテリアン大祭」におけるプラグマティズム的〈一と多〉の表現をめぐって」（岩手大学人文社会科学部宮沢賢治いわて学センター編『賢治学』7，2020 年），167 頁.
[72] 宮沢 13（上）本文篇，495～580 頁.
[73] 菊池信一「石鳥谷肥料設計相談所の思ひ出」（草野心平編『宮澤賢治追悼』次郎社，1934 年），13 頁.
[74] 井上克弘「土壌肥料と宮沢賢治 1 ―ペドロジスト，エダフォロジストとしての賢治」（『日本土壌肥料学雑誌』67（2），日本土壌肥料学会，1996 年 4 月），211 頁.
[75] 日蓮主義の影響を受けた石原莞爾の構想に発する満州建国大学では，各民族の特色を失わない「五族協和」が教育精神とされたが，そこでは宮沢賢治の「精

神歌」が歌われていた（河田宏『満州建国大学物語』原書房，2002 年，223～224 頁）．建大教授であった藤田松二の主張は，農業を通じて満州を豊かにしようとするものであり（百々和『自分史回想』文芸社，2007 年，39 頁），超国家主義と簡単には評し得ない農本主義の思想が展開されていたことが認められる．